

発行所 カトリック長崎大司教区 広報委員会
発行人 カトリック長崎大司教区 広報委員会
〒852-8113 長崎市上野町 10-34
カトリックセンター内
TEL095(843)3869 FAX095(843)3417
郵便振替番号 01880-5-2699
カトリック長崎大司教区ホームページ
http://www.nagasaki.catholic.jp
印刷所 株式会社 藤木博英社
〒850-0852 長崎市万屋町 5-13
TEL095(821)2146 FAX095(821)2148



教皇さまの
意向のために祈りましょう

- ①一般：福音を伝える聖職者
- ②宣教：旅する教会
- ③日本：日本における福音宣教の推進

教 区 報
1000号

同じ道をたどるために

大司教 ヨセフ 高見 三 明

『長崎カトリック教報』第1号が1928(昭和3)年11月1日に刊行されて以来、本号をもって1000号を数えます。一つの大きな節目です。ただし、政府の出版物統制により1940(昭和15)年10月1日第287号をもって廃刊を余儀なくされ、1948(昭和23)年4月15日第288号をもって再刊されました。さらに2000年1月号より、『よきおとずれ』と改称され現在に至っています。

早坂久之助司教と教区報

第1号は、早坂司教が長崎に着座された年に発刊されました。ジャン・クロード・コンバス司教の後継者に任命された早坂久之助司教(函館教区司教、1883年9月14日仙台市生)は、最初の日本人司教として1927年10月30日、聖ペトロ大聖堂中央祭壇奥の教皇座の聖堂で、ピオ11世教皇によって叙階されました。

その後、イタリア、フランス(ルルド、リジュ)、ベルギー、アメリカ合衆国を歴訪し、宣教地日本の教会の実情を訴えて篤志家の援助を求められました。翌1928年3月29日横浜入港、仙台に帰省した後、4月25日午後4時1分に長崎駅着、5時に大浦天主堂で着座なさいました。教区報はそ

列聖25周年を迎えて十六聖人殉教祭

9月30日、14時から「聖トマス西と15殉教者祭」が長崎市の中町教会で行われた。

今年には列聖から25年を迎えたことを記念して、例年行われていた西坂からのロザリオ行列に代えて、当時バチカンで行われた列聖式の様子を短くまとめた映像を鑑賞し、「聖トマス西と15殉教者の玄義によるロザリオの祈り」を唱えた。高見三明大司教、子どもたち、フィリピンの人たちがロザリオを先唱し、共に祈り合う印象的な雰囲気となった。



前日の29日に祝われた聖トマス西の故郷・生月の山田教会献堂100周年に合わせ、その計らいを思う実りある殉教祭となった。

殉教祭 信仰の歴史をたどり直す

有馬川殉教者の熱き信仰に倣って

10月7日、島原・天草殉教者記念の集いが、島原教会(島原市)と崎津教会・大江教会・本渡教会(天草市)の主催で行われた。今年には188殉教者の中の8人が有馬川で殉教して399年目の命日にあたり、有馬川殉教記念碑の前でミサを行った。

信仰年の始まりにふさわしく「信仰によって従うもの」となり、「信」といふテーマのもと、長崎純心大学・鹿児島純心女子大学のカトリック学生の会、天



草からの50人の信徒など、各地から150人余りが集まった。有馬川の中洲で信仰を証しして、燃えさかる炎の中で命をささげた彼らの熱き信仰に連なるう」と語った。

小さな小教区を助けて、会場設営や聖歌などに協力をいただいたコレジオ生、修練者をはじめ多くの方々のご奉仕に感謝。

教区内および全教会との一致と交わりの場

教区報を通して、長崎教区の人々は、キリストの教え、司教教書、教区内の情報などを共有するわけですから、全教会の中で長崎

1613年10月7日、有馬川の中洲には3家族8人が柱に縛られていた。その両岸には、一張羅の着物を着け、ろうそくをロザリオを手にした2万人の信者たちが陣取っていた。

188福者には、他にも家族の霊性を伝える人々がいる。生月の殉教者ガスパル西玄可、妻ウルスラ、長男ヨハネ又市。禁教のために多くの武士が平戸・生月を後にする中、代官職を捨て、逃げ場のない仲間と共に生きる道を選んだ家族である。

家族の絆・信仰の絆

ミゼリコルディアの組の責任者として献身的に奉仕する玄可を通して、人々は神の愛を知り、家族は信仰の絆を育んでいった。1609年、玄可は棄教を拒み、妻と長男は家の近くで、玄可

は黒瀬の辻で処刑された。両親と兄の殉教は、有馬のセミナリオにいた次男トマス六左衛門にも伝えられた。その殉教は、トマスにとつて新たに目指すべき道となった。マカオへの追放、学びの場であつたコレジオの閉鎖。それでも司祭になる夢を諦めきれず、マニラへ。幾多の困難を排して、トマスが司祭に叙階されたのは1626年、36歳の時である。その後、15年ぶりに日本へ

発刊の辭

第1号の記事の中で目立つのは、教皇ピ

オ11世による早坂司教任命書と祝辞ですが、「発刊の辭」は、冒頭次のように述べています。

「同じ親の下に同じ信望愛で生きて居る兄弟姉妹たちは同じ心であらねばならぬ、同じ心である限りは悲喜哀樂を共にするばかりでなく、同じ方針で同じ道を共に歩むのが當然である。」

カトリック教會といふのが恰度それである……自分はカトリック教徒であるといふ事實其自身から世界に於ける同教徒と同じ心で結ばれ同じ主義方針で同じ道を歩んで居るのである……決してや其れが……同じ長崎教区のカトリック信徒たる我々に於いては、猶更の事であらねばならぬ。此の同じ心を一層緊密に結びつけて、同じ主義方針のもとに同じ道を辿らうとする精神から今回吾長崎教区に此のカトリック教報なるものが生れたのである」

続いて概要次のように述べています。この教区報が、教区内に対しては私たち信徒の全精神、信望愛に生きかつ燃えているカトリック者の心がますます純化され向上させられるのに役立ち、外に対しては、まだカトリック精神を知らず、さらにはその存在さえも認めない同胞にこのようなすばらしい精神が私たちカトリック信者の間にあること、かつこれを混沌とした思想世界に筋の光明として示すことができるなら、当初の使命を果たすことになるのです。

今後の教区報への期待

教区報の創刊が、世相を反映して、昭和天皇の即位という「御大典」の記念事業の一つとされてきたことは別問題として、「発刊の辭」で述べられている教区報の意義と役割を再認識し、継承発展させていくことが大切ではないでしょうか。特に「信仰年」を迎えた今、信者の信仰の涵養と周囲の人々への福音宣教を視野に入れながら、情報伝達だけではなく、信仰と愛の心を育て広めるのに役立つような充実した内容にすることが期待されます。

最後に、教区報の歩みをこれまで導いてくださった神様に感謝申し上げると同時に、歴代の編集長、広報委員、寄稿者、印刷会社、そして教区内外の読者の皆様から感謝を申し上げます。『カトリック教報』あらため『よきおとずれ』が、今後もキリストの教えと精神、そしてさまざまな情報を正しく伝えて教区の歴史をつくり、教区のさらなる発展のために知恵と勇気を与える機関紙となることを期待したいと思います。



信仰年連載企画
長崎はなぜ長崎を棄てるのか ②

生涯にわたって続く旅のために

～罪にも勝る神の愛を信じて～

長崎教区司祭 葛嶋 秀信

記念し生きる信仰

「信仰年は、信仰を典礼の中で、とくに感謝の祭儀の中で深く『記念』するためのよい機会ともなります。感謝の祭儀は『教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉』だからです(同9)」。しかし、ご聖体に近づくことが制限されることがあります。それは信じる人にとって、大きな試練です。『弟子たちを生かすために与えられたいのちのパンの味を再発見』(同3) したい人は、試練の中でも、生きるように招き続けるキリスト(エゼキエル16・4・6参照)に出会います。



信仰年開年ミサ
中町教会 10月11日

告白する信仰

「信者の生活の『あかし』がますます信頼の置けるものとなることを祈ります。わたしたちが告白し、記念し、生き、祈る信仰の内容を再発見し、信じることにについて考察することは、とくに『信仰年』の間すべての信者が自分のものとしなければならぬ務めです」(自発教令『信仰の門』9)とベネディクト16世教皇様は語りかけておられます。

神と兄弟たちへ告白する信仰は、教会との交わりの絆の中で確かなものとされます。「信仰年がすべての信者のうちに、完全かつ新たな確信と、信頼と希望をもって信仰を『告白』したいという望みを」(同9) 呼び起こすことが期待されています。信仰を告白する時、それは完全さを告白するといふよりも、不完全さや醜さ、汚れや罪を告白する場面が多くなるのではないでしょうか。結婚問題に苦悩する人々に対して、教会はどのような配慮ができるのでしょうか。

では、夫婦として、または家庭の中で困難にある人々のことを考えてみましょう。夫婦の問題を抱える人々のうちに、大きく2つのグループがあります。1つは有効な教会法上の絆を持たずに生きていく人々で、異端者とは見なされなくとも、教会との完全な交わりにはいない人とされ、以下の①から③のグループに入ります。もう1つは教会の規定に反する危険を持っている、教会の教えに反する可能性を持つ人々で、④と⑤のグループに入ります。これらの人々のためにどのような解決策が準備されているのでしょうか。

2012年10月11日 信仰年開年

信仰年の開年を告げるミサが、10月11日(木)各小教区で、14日(日)浦上(大司教司式)・平戸・相浦・青方・福江の各教会で行われた。

2013年11月24日の「王であるキリスト」の祭日まで続く信仰年に際して、高見三明大司教は次の3つを勧めている。

①「ニケア・コンスタンチノープル信条」を唱える(可能であればラテン語で歌う)。

②信仰を強めるゆるしの秘跡に頻繁にあずかる。

③聖体拝領のとき、信仰宣言ということを意識しながら、「キリストの御体」という司祭のことばにはっきりとした声で「アーメン」と応える。

正義と平和全国集会・2012 長崎大会



カトリック正義と平和全国集会・長崎大会(長崎大司教区主催)が、10月6日から8日まで、カトリックセンター、大司教館、浦上教会を会場に開催され、県内外から約450人が参加した。

今年の全国集会のテーマは「正義と平和」の原点を探る。1日目の基調講演は、南山大学教授のマイケル・シーゲル師(神学修道会)を講師に迎え、このテーマについて掘り下げた。シーゲル師は、「天にあるもの、地にあるもの、すべてのものの和解」「目に見える兄弟を愛せなければ、目に見えない神を愛することはできない」といったことばを引用しながら、「この世の繋がりは永遠の価値があり、一層、この世の中のことに注視すべき」と語り、正義と平和が目指す方向については、一人一人が理

解され、繋がりを深める、「人間のあらゆる側面を理解する社会」であるとした。

2日目は、ミサに続き、社会司教委員会シンポジウム『なぜ教会は社会問題にかかわるのか』が浦上教会聖堂で行われた。ホアン・マシア師(イエズス会)の導入に続いて、松浦悟郎司教(大阪教区)から「なぜ教会は社会問題にかかわるのか」について、幸田和生司教(東京教区)から「原発と基地くなぜキリスト者として看過できないのか」について発言がなされた。また、この日の午後には10のテーマに分かれて

とか健康問題を抱えているとか、養うべき子供がいるなどの正当な理由のもと、つまりさきを避け、夫婦のようにではなく兄弟姉妹のように生活することが勧められます。こうして、ゆるしの秘跡と聖体の秘跡に近づく事も不可能ではあります(同84参照)。しかし、兄弟姉妹のように生活できない人々だからといって、信者として持っている基本的な権利や義務をまったく使用することも果たすこともできないものではありません。離婚者で再婚した人でも、聖体拝領はできなくてもミサにあずかり、種々の祈りや共同体の中での典礼行事・活動や黙想会、小教区活動・使徒職活動に参加するよう勧められます。また、回心を示して亡くなった場合、教会での葬儀を拒まれることはないのです。

また再婚者については、主任司祭はその前婚が、当事者の能力や障害の免除の欠如のため、また教会法上の方式が守られていなかったため無効といえる可能性がないかを教区法務事務所(大司教館の古巣、神父担当)に依頼し調べてもらうことも大事なことです。そして結婚した2人のうち少なくとも一方が非受洗者であった場合、民法上の離婚後、その当事者のどちらかがカトリック信徒か、もしくはカトリックに改宗しようと望んでいる人と新しい結婚を望んでいる時、いくつかの条件が満たされれば、前婚の絆の解消を求めてローマへの嘆願を行うことができます。『教会において魂の救いこそ最高の法』(教会法第1752条)であることを信じ、信仰の扉をたたき続けることは、もう一つの信仰の証しだといえます。

④結婚はしたものの、離婚し、その状態にとどまっている人々には、他の妨げがない限り、聖体拝領が許されています。「この人々の忠実さと、キリスト者としての一貫性は、世界と教会に対するあかしとして特別な価値を」(同83) 持つからです。

⑤別居状態にある人も、再婚を差し控え、他の妨げがない限り、聖体の恵みに近づくことができま

「信仰の門」に入るとは、生涯にわたって続く旅に出発すること(同1)です。すし、続く旅のために、「神は罪よりも強い自分の愛を(夫婦や家族に)授け、結婚の誓約と家庭の交わりを再び新たにし、完成するよう、導いてくださる」(「家庭」58) からです。

祈る信仰

「多くのキリスト信者は愛をもって、孤独な人、除け者にされた人に自分の命をささげました。なぜなら、これらの人々のうちにキリストご自身のみ顔が映し出されているからです」(「信仰の門」14)。

賛美と感謝、つまり祈りは神のお望みです。祈りの欠けた一日は、空しく過ぎ去っていきます。神の望まれることを行って初めて神のみ旨を行う人となれます。祈って、たとえ自分自身で喜びを感じなくても、祈ることを続けなければならぬのは、それが自己満足のためではなく、神を賛美し神に感謝するためだからです。祈りが無味乾燥でも、神は喜んで聞いてくださっています。いつまでも続く祈りをささげたいものです。

長崎教区評議会 大震災復興支援ボランティア募集(ボランティア)

期間: 2012年11月10日(土)～16日(金)

定員: 15名程度(マイクロバス利用)

申込み: 所属小教区にて

問合せ: 教区本部事務局(松尾)

Tel 095-842-4450 Fax 095-842-4460

* 次回のボランティア派遣は2013年4月を予定しています。

ご先祖に心より感謝を・・・

材石 治明

長崎本店 長崎市城東町13-1 電話 (095) 846-3598

大村店 大村市民霊園内 電話 (0957) 50-3008

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売

たつみ産業株式会社

西田商事株式会社

代表取締役 ミカエル 西田 剛

本社 〒857-1166 佐世保市木風町1468番地

TEL (0956) 31-8268

主の平安

カトリック式葬祭・飾付一式

(有) 栄光式典社

代表取締役 ヨハネ 西村 勇二

長崎市辻町7-18 TEL (095) 844-4011

24時間営業 FAX (095) 843-9896

お知らせ

NAKAMACHI セント・ポール

すでにお知らせいたしておりましたが、NAKAMACHI セント・ポールは12月28日をもって終了させていただきます。皆様には長年にわたりご利用いただき、心からお礼を申し上げます。いつもお祈りと励ましをいただき感謝の心でいっぱいです。12月には感謝セールをいたしますので、ぜひお出かけください。お待ち申し上げます。

開店時間 11時～17時(日曜日は10時～12時)

休日 水曜日・祝祭日

場所 長崎市中町1・7

教区の歴史を記録して84年

創刊 1928 ~休刊 1940 ~再刊 1948 ~現在 2012

教区報「よきおとずれ」発刊1000号を迎えて

創刊者 早坂久之助司教様の御こと

長崎純心聖母会 Sr.片岡 千鶴子

1. 初の日本人司教

早坂久之助司教の誕生

長崎大司教区報「よきおとずれ」が本号(2012年11月)をもって1000号を迎えました。創刊号は1928年11月号です。教区報発刊のスタートを切ったこの「1928年」は、長崎教区が「新しい時代」に向けて幕開けした記念すべき年で、教区報の発刊もそれに伴う事業の一つでした。「新しい時代の幕開け」とは何でしょうか。それは早坂久之助司教様が初の日本人長崎教区長として着任した年だったからです。私たちはつい5年前に、この最初の邦人司教誕生80周年を記念し、特にその基を築いたバリミッシン会に深甚の感謝を捧げたところですが、ここでは改めて初の日本人長崎教区長の誕生を振り返ってみます。

1927年10月30日、バチカンの聖ペトロ大聖堂において、ピオ11世教皇様の司式のもと、初の邦人司教早坂久之助司教様が誕生しました。ピオ11世教皇様はアジアの布教地に新しい息吹

を吹き入れた「布教の教皇」と呼ばれている教皇様です。19世紀はヨーロッパ諸国の海外進出に伴って教会の布教活動が飛躍的に進んだ時代でした。アジアの多くの地で教会が成長していき、20世紀に入っても布教地の教会の責任者である司教は、ヨーロッパ人が任命されていました。ピオ11世教皇様は1926年に回勅「レールム・エクレジアエ」を發布して、今や布教地の教会は自国人の司教が任命されて、自立した教会運営を行うべき時が来たと宣言されたのです。そして1926年、聖ペトロ大聖堂において教皇自ら6人の中国人司教の叙階式を司式し、「自国人聖職者に委ねられた新しい時代」の到来を全教会に示されました。

当時の日本の教会は「信徒発見」による教会の復活以来、バリミッシン会に司牧が委ねられていました。1894年からは他の宣教会も来日し各地の司牧を分担していましたが、責任者は外国人宣教師でした。長崎教区では代々バリミッシン会のフランス人

司教様が教区長でした。ところが1926年、第4代長崎教区長コンバス司教様が帰天、長崎教区長位が空位になっていたのです。ピオ11世教皇様は、日本の教会にも回勅「レールム・エクレジアエ」の方針を適用することを定め、1927年、函館教区司祭早坂久之助神父を長崎司教に選任しました。早坂神父はウルバノ大学における最初の日本人神学生です。帰国後、函館教区司祭として活動しますが、1922年に第2代教皇庁使節ジャルデイーニ大司教の秘書に抜擢され、日本の教会の中核で勤務しています。1925年、大司教の帰国によって函館教区に戻っていたのです。ピオ11世教皇様は、日本人司教の叙階式も聖ペトロ大聖堂で自らの司式で行うことを決定しました。こうして10月30日、大聖堂を埋め尽くした高位聖職者、各国外交団をはじめ多くの参列者が見守る中、3時間に及ぶ荘厳な叙階式が執り行われました。

教皇様は叙階式後の教皇祝辞の中で、新司教への期待を次のように述べられました。「敬愛する兄弟よ、あなたにはキリストの王国を日本人の間に広める使命が与えられています。その成果はあなたの

使徒的熱意と、同じ熱意に燃えるキリストの使徒を如何に多く、日本人の中から養成できるかに掛かっている…」

2. 初代邦人長崎教区長の着任

この教皇様の日本人最初の司教に対する期待は、早坂司教様の強い使命感となり、長崎教区司牧の指針となりました。司教様は叙階式の後、欧米5ヶ国44ヶ所を5ヶ月にわたって歴訪し、1928年3月29日帰国、4月25日長崎に到着、当日午後5時、大浦天主堂において着座式が行われました。4月29日には浦上天主堂で教区の正式歓迎ミサが捧げられて、早坂司教様の教区長としての仕事が始まったのです。当時の長崎教区は邦人司祭30人、信徒数5万1千7百人、教会堂は58ヶ所を数えていました。信徒たちは新しい日本人司教様を迎えた喜びに溢れていました。着座後、司教様が五島の伝道者養成所を訪れたときの生徒の回顧録に、「教室に入ってから、司教様を見ては、驚きの声が洩れ、拍手で迎え、高き西洋人で長いあごひげのイメージが、今見る早坂司教様は若々しく、ヒゲなどなく、理知的な風貌に、紫の司教のシンボル、金の鎖の十字架、蘭切れのよい日本語で、(やあ皆さん、始めまして。)'とのお声に感嘆おく能わず嬉しくてうれしくて涙があふれた」とあり

ます。司教様はこのような信徒たちの喜びに、応えながら自分に託された使命、日本における「キリストの王国の拡大」のために必要な事業に取り組んでいくことになりました。

着任後の司教様を待っていたのは、前教区長コンバス司教様ご帰天によって滞っていた堅信式でした。司教様は堅信式のために各地の小教区を巡回しながら、自分に託されたブドウ畑をつぶさに視察し、現状の把握と理解に努めておられます。

何よりも必要なことは、教区長としての司牧の理念と計画を教区民に知らせ、信徒たちも長崎教区の歩みを自分のこととして知ることによって、一つ心に結ばれて「新しい時代」の長崎教区を築くことでした。司教様はこの目的のために、浦川和三郎神父様(のちの仙台司教)の協力のもと、長崎カトリック教報の発刊に着手され、6ヶ月後の11月1日に第1号を発刊したのです。発刊第1号の紙面を見ると、教区長早坂司教の将来構想、海外ニュース、国内ニュース、神父様方の動静、台風で甚大な被害を受けた伊予島教会への復興募金協力の呼び掛け等の欄が設けられ、発刊が早坂司教叙階の日の1周年目に当たることを記念し「回顧一周年」と銘打って長崎司教任命の教皇辞令、司教叙階式における教皇祝辞を掲載して改めて長崎教区の「新しい時代」の幕開けを告げることによって、スペースを割いて

ています。

前述の回顧録に「早坂司教様が教区長となつてすぐに創刊された教報は、一戸に一部宛配布され、我々にとつても唯一の教導機関で、教会内の出来ごと、司教教書、新司祭の動向などすべて之によって知り、之によって導かれていた」とあって、教報が信徒たちの教会に対する関心を高め、同時に信仰教育の啓蒙的役割を担って順調に発行されていることが伺えます。司教様の将来構想の中心は、教皇様から託された使命の実現のために働く「熱意に燃えるキリストの使徒」の養成です。カトリック連合青年会の樹立と組織的な活動の展開、新しい司祭養成を目指す神学生教育の刷新、純心聖母会の創立と純心学園の開設、等々順次実現していき、長崎教区は活性化していきます。

それを支えたのが「長崎カトリック教報」(2000年より「よきおとずれ」に改名)です。教報は早坂司教様のこのような企画を教区民に知らせ、参加を促して司教様の夢を実現させる強力な推進力になったのです。

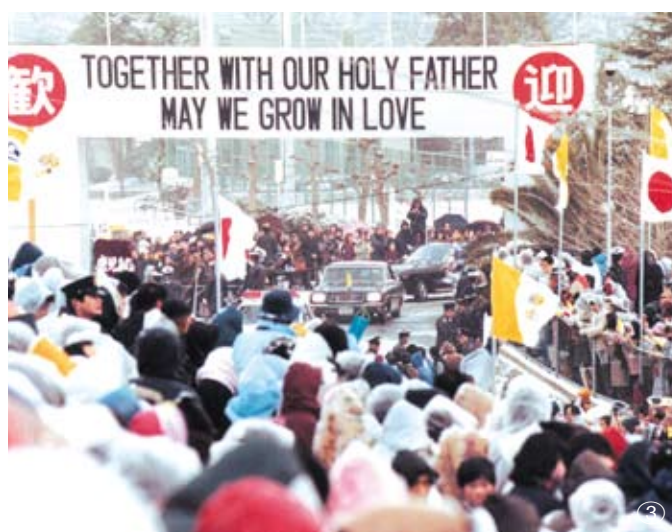
歴代編集長(発行日による)

初代	浦川和三郎師(後に仙台司教)	1928年11月1日、36年11月15日
第2代	里脇浅次郎師(後に枢機卿)	1936年12月1日、55年5月1日
第3代	糸永 真一師(後に鹿児島司教)	1955年6月1日、69年12月1日
第4代	三村 誠一師	1970年1月1日、81年5月1日
第5代	中島 健二師	1981年6月1日、91年4月1日
第6代	前田 万葉師(現広島司教)	1991年5月1日、94年4月1日
第7代	久志利津男師	1994年5月1日、98年4月1日
第8代	川内 和則師	1998年5月1日、2001年5月1日
第9代	久志利津男師	2001年6月1日、05年4月1日
第10代	中田 輝次師	2005年4月24日号外、10年4月1日
第11代	下窄 英知師	2010年5月1日、12年4月1日
第12代	大水 文隆師	2012年5月1日、現在

長崎教区における主なできごと

1862	6.8	日本二十六殉教者の列聖
1865	3.17	大浦天主堂において信徒発見
1867		浦上四番崩れの始まり
1873		禁教令廃止 浦上信徒、配流先から帰郷
1891	6.15	長崎教区の設立
1914	3.17	浦上教会献堂
1927	10.30	早坂久之助師、初の邦人司教として叙階
1928	4.25	早坂司教の着座式
1928	11.1	「長崎カトリック教報」発刊
1930		コルベ神父ら3人が来崎
1933	1.23	大浦天主堂、国宝に指定
1937		山口愛次郎師、長崎司教に叙階
1940	10.1	発行後、「長崎カトリック教報」廃刊
1945	8.9	11時2分、原爆投下 浦上教会崩壊
1948	4.15	「カトリック教報」復刊(第288号)
1949		ザビエル渡来400年祭
1953		浦上教会の再建決定
		大浦天主堂、再度国宝に指定
1956	4.9	西坂殉教地が県史跡に指定
1959	5.14	長崎大司教区へ昇格
		山口司教の大司教任命
	11.1	浦上教会献堂式
1962	1.1	長崎教区カテドラル(司教座聖堂)が大浦天主堂から浦上教会に変更
1962	6.10	日本二十六聖人列聖100年祭
1962	10.11	第2バチカン公会議(～1965.12.8)
1965	2.19	大浦天主堂献堂100周年
	3.17	信徒発見100周年
1967		「長崎大司教区広報委員会」発足
1969	3.16	里脇浅次郎司教の着座(鹿児島教区より)
1971	10.4	カトリックセンター竣工
1978	2.5	松永久次郎師、司教叙階(長崎補佐司教)
1979	6.30	里脇大司教、枢機卿に親任
1981	2.25	教皇ヨハネ・パウロ2世来崎(～26)
1982	4.25	マザーテレサ来崎
1990	5.8	島本 要司教の着座(浦和教区より)
1992	10.11	『カトリック教会のカテキズム』発布
1993		カトリック長崎大司教館完成
1994		カトリック教報800号発行
1996	8.8	里脇枢機卿逝去
1997	2.5	日本二十六聖人殉教400年祭
2000		題号が「カトリック教報」から「よきおとずれ」に、発行所が「カトリック教報社」から「教区広報委員会」に変わる
2002	4.29	高見三明師、司教叙階(長崎補佐司教)
2002	8.31	島本大司教逝去
2003	12.14	高見三明司教、長崎大司教として着座
2005	4.2	ヨハネ・パウロ2世逝去 号外①
2007	6.1	ペトロ岐部と187殉教者の列福、教皇ベネディクト16世により承認 号外②
2008	11.24	ペトロ岐部と187殉教者の列福式
2010	4.21	浦上の被爆マリア像、教皇の祝福を受ける
2012	10.11	「信仰年」の開年(～2013.11.24)
2012	11.1	「よきおとずれ」1000号発行
2014		教区代表者会議(シノドス)開催
2015	3.17	信徒発見150周年

出来事



①平和祈願祭(8月9日) ②ペトロ岐部と187殉教者列福式(2008年11月24日) ③教皇ヨハネ・パウロ2世来崎(1981年2月25~26日) ④教皇ベネディクト16世被爆マリア像を祝福(2010年4月21日・パチカン) ⑤ザビエル渡来400年祭(1949年5月29日・浦上教会) ⑥聖体行列(1946年6月23日・浦上教会)

あなたは誰から信仰を受け取りましたか



①ブチジャン司教 ②早坂久之助司教 ③浦川和三郎司教 ④里脇浅次郎枢機卿と福者マザーテレサ ⑤永井隆 ⑥秋月辰一郎 ⑦片岡弥吉 ⑧岩永マキ ⑨江角ヤス修道女 ⑩山口愛次郎大司教 ⑪島本要大司教 ⑫聖コルベ神父 ⑬昭和少年使節と結城了悟神父



場所



一人で生きることができないように、だれも一人で信じることはできません。自分で自分に生命を与えることができないように、だれも自分に信仰を与えることはできません。信仰者は、信仰を他の人から受け取りました。それを他の人に伝えなければなりません。(『カトリック教会のカテキズム』166)

伊東マンシヨ没後400年特別寄稿

あなたがたの間では、そうではない ――伊東マンシヨの霊性――

列聖列福特別委員会 古巣 馨

「『信仰年』において決定的に重要なことは、信仰の歴史をたどり直すことです」(教皇ベネディクト16世自発教令『信仰の門』13)。マタイが福音書をイエス・キリストの系図によつてはじめるように、「わたし」と「わたしたち」の信仰の系譜を訪ねることは、信仰年の大きな目的である。

ザビエルによつて日本に時かれた福音の種が、迫害の中にあつても実を結ぶことができた理由の一つは、天正遣欧使節が体現したローマと日本の教会との強い絆といわれる。彼らの跡をたどることは、わたしたちの「今」と信仰の「根」を見つめること。本稿は、伊東マンシヨ没後400年記念に際して、大分教区が列聖列福特別委員会(司教協議会)のメンバーである古巣馨師に依頼したものである。大分教区の了解を得て本紙に掲載する。(長崎教区広報委員会)

1. 主がお入り用です

伊東マンシヨの手紙はこれまで11通が確認されています。2通をのぞくと、大半が帰国後、天草のコレジオ時代に書かれています。その中の1通に、ローマにいたニコラオ・デ・ボバディリヤ神父に宛てたスペイン語の手紙(1592年3月4日付)があります。

ボバディリヤは、パリ大学でロヨラのイグナチオと出会い、1534年に彼の指導のもとに靈操を行います。同年8月15日、モンマルトルの聖デニス小聖堂でイグナチオやザビエルとともに誓願を立て、イエズス会を発足させた会員の1人です。宗教改革という教会がこれまで体験したことのない行き詰まりの中で誕生したイエズス会。やがて神はこの修道会を通して、日本の教会を誕生させ、育んでいくのです。

1540年3月、イグナチオはポルトガル国王の要請に応え、会員2人のインド派遣を決めました。その中の1人がボバディリヤでした。しかしナポリにいたボバディリヤは病床にあり、イグナチオはその代役として、秘書のザビエルを任命しました。ザビエルははじめからアジア宣教のために準備された人ではなく、

すぐそばにいて用立てられた人でした。

4人の使節がローマに着いたとき、イエズス会創立時の会員でただ1人存命していたのがボバディリヤでした。彼はナポリからわざわざ使節団を訪ね、後日その時の感動を手紙に託し、帰路に着いたマンシヨたちに送っています。ボバディリヤは、使節たちの中にザビエルの姿を見たのです。

ボバディリヤの代役となつたザビエルは、摂理の中で日本に渡り、福音の種を蒔き、過酷な宣教の途上で客死します。その実りをボバディリヤに見届けさせる神の不思議な計らい。杖も袋もパンも持たず、とほとほと福音を伝えるザビエルの背後に、片ときも忘れず折り続けた同胞がいたのです。ザビエルの死後も、ボバディリヤのまなざしは日本にそそがれていました。そしてあのとき、マンシヨは年老いたボバディリヤの瞳の中にイグナチオとザビエルを見たのです。

「わたしは神父様にお目にかかり、お話できたことを本当に大きな恵みだと知り、幸せに思っています。神父様は、わたしたちの(修道会の)父イグナチオの生きた思い出だからです。……この特別の恵みに対して主に感謝しています」(1

592年3月4日付、ボバディリヤへの手紙、彼はこの手紙を受け取る前に死去)

マンシヨはボバディリヤと出会い、召命の不思議さと、祈りを通して支え合う仲間の絆を再確認しています。代役として派遣される召命と陰で支え続ける召命、どちらも「主がお入り用なのです」(マタイ21・3)。

若いころザビエルに出会つた豊後の大友宗麟は、その後も宣教師を保護し、援助を続けていました。そして1578年8月28日、臼杵の教会で洗礼を受けフランシスコと名のります。宗麟のもとに身を寄せていた伊東一族は、信仰の面でも深い影響を受け、一族の多くが洗礼を受けています。その中に、本家の伊東義祐の子義益の次男でジェロニモ祐勝がいました。秀才だったジェロニモは、安土

のセミナリオに学び、信長の前でオルガンを演奏したことも知られています。一方、分家のマンシヨは、父伊東祐青と母町上(義益の妹)の子として生を受けます。本家のジェロニモ祐勝とはいこの間柄です。1580年、弟ユストと一緒に臼杵で洗礼を受け、マンシヨは有馬のセミナリオに学び、弟ユストも後にセミナリオに入学しています。

巡察師ヴァリニャーノによるローマ使節団の計画の中で、宗麟の名代として最初に名前が上がつたのは、安土にいた本家のジェロニモ祐勝でした。しかし、安土からの参加は出航日には間に合わず、ヴァリニャーノは代わりにいこのマンシヨを選んだのです。これが、代役としての伊東マンシヨの召命のはじまりでした。ザビエルとボバディリヤとマンシヨが、神の計画の中で交差していきます。

「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つないであり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどこいて、わたしのところに引いて来なさい。もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してく

れる」(マタイ21・2・3)

神がご自分の計画を推し進めていくときの典型的なやり方を、福音書はこの小さな物語に託しています。人の目には役に立ちそうにもない、だれも期待せず、目もくれない。しかし、人の目には「まさか」と映るその人、その出来事に、神は歴史の中で重要な役割を担わせてきたことをわたしたちは知っています。なぜ、わたしなのか。理解できず受け入れ難いことを前に、ベトファゲでのロバの子の話は福音です。主がお入り用です。わたしたちがキリスト者であることの出発点、そして、今もその身分で生きるこの意味をここに見いだします。

2. 秘めた思いと信頼と

4人の遣欧使節団は、8年半あまりの長旅の末、1590年7月21日に長崎の港に戻りました。

「非常に長い海路の困難を乗り越え、いろいろな複雑な問題を解決してから、無事に長崎に入港したとき、まず考えたことは、数年前から心を燃えさせていた(イエズス会入会)の望みを、全力をつくし

て全うしようということでした」(1592年付、ローマ総長宛ての手紙)

マンシヨは、帰国時の心境を記しています。しかし、マンシヨたちとともに再来日したヴァリニャーノは、遣欧使節をすぐに上京させ、秀吉との謁見が終わるまで入会を延期します。これで二度目の延期でした。一度目の入会希望は、ローマに着いたときでした。アクアヴィヴァ総長は、帰国後よく準備した上で、と延期されていたのです。

1601年には、有馬のセミナリオの同期生だったセバステイアン木村とルイス・ニアバラが、セルケイラ司教によつて司祭に叙階されます。日本人神学生の早期叙階は楽観的でした。しかし、この頃から日本人修道士の数の多さや、修道士になつても貞潔の誓いに背いたり、弱さや傲慢のために問題を引き起こしたりと、イエズス会上長者のなかに日本人神学生に対する偏見が生まれてきます。とうとう、ヴァリニャーノは、日本人司祭叙階への厳しい条件と当面の叙階延期を決定します。

ローマに随行し、4人の霊的指導者で

日向(宮崎)出身。正使節。豊後の領主であつた大友義鎮(宗麟)の名代として派遣された。長崎で病没。



伊東マンシヨ (1570～1612年)

肥前波佐見(長崎)出身。副使節。ラテン語が得意で、翻訳や印刷の仕事に力を発揮。マカオで死去。



原マルチノ (1568～1629年)

大村純忠の名代。正使節。1601年、天草のコレジオをやめ、有馬家の家来になつた。その後の消息は不明。



千々石ミゲル (1570～?年)

肥前中浦の領主の子。副使節。1633年、長崎の西坂で殉教した。2008年、福者にあげられる。



中浦ジュリアン (1570～1633年)

もあつたメスキータは、「この決定は日本国民に汚点をつけるものだ」と厳しく抗議します。また、修練長コンファロニエロは、「叙階の遅延は彼らの信用を失わせること以外に何の利益もありません。ヨーロッパやインドの学生たちに課されていない条件が、なぜ彼らだけに課されるのか、疑われるのは上長者たちです。……この延期に対して、彼らは謙虚に愛情をもつて受け止めています。その徳に接するとわたしの方が感化されるほどです。しかし、これ以上長く待たせると、いつかは彼らも疲れ果ててしまうでしょう」と、試練のただ中にあるマンシヨたちの境遇をローマの総長に訴えています。

イエズス会と養成者たちの軋轢の中で、千々石ミゲルはコレジオを去り、原マルチノは沈黙の中で時を待ちます。一方、伊東マンシヨと中浦ジュリアンは天草からマカオのコレジオに移り、養成は続けられました。

帰国後、マンシヨは有馬のセミナリオで、トマス西やディエゴ結城了雪、ベトロ岐部たちにラテン語を教え、中浦ジュリアンは博多・京都・有馬を行き来し司祭の司牧を手伝いました。やがて1607年、助祭叙階のために長崎に戻ってきました。そして1608年9月、長崎の被昇天の聖母教会(現在の県庁所在地)で、セルケイラ司教によつて伊東マンシヨ、原マルチノ、中浦ジュリアンの3人は司祭に叙階されました。有馬のセミナリオの第一期生として入学してから、実に28年の歳月が経っていました。

「延期されることは心を悩ませますが、神の摂理がもつと良い結果をもたらすように導いてくださると思ひ、ある程度まで安心しています」(1592年12月1日付、アクアヴィヴァ総長への手紙)願つてもすぐに叶うことのない人生を前に、マンシヨが示した信仰告白です。祈りながら時を待つこと、信頼してゆだねること、深い謙虚さ、いつも変わらない氣立てのよさ、残されたわずかな資料からマンシヨの人柄と信仰が浮かび上がっ

できます。主がお入り用です」という招きに応え、43年の人生を貫いた彼の霊性をここに見るができます。

3. あなたがたの間では

伊東神父に与えられた司祭生活はわずか4年間でした。

「ローマへ赴いた日本人、日向国生まれ。23歳。親切で気立てがいい。イエズス会に入って1年半であるが、特許によりラテン語第一級のクラスに学ぶ。日本文学は多くを知らない。」これは、1593年1月1日付、イエズス会第一カタログに記された伊東マンシヨの人物評価です。『都於郡王の子、豊後王フランシスコにより教皇に派遣された使節』（ローマ名誉市民証書文書、ローマ使節団のなかで第一人者だった伊東マンシヨは、やがて語学に長け聡明な原マルチノの陰に隠れるようになります。帰国後、その位置づけはイエズス会のなかでもはっきりしています。原マルチノがマカオのコレジオに移されなかったのは、司祭になる前から翻訳や印刷物の重責を担っていたからです。マルチノは、日本のイエズス会にとって不可欠の存在となっていたのです。

途中で何を議論していたのか（マルコ9・33）。3人も集まればもう互いの序列はきまります。しかし、あなたがたの間では、そうではない（マタイ20・26）、福音は人の思いから神の思いへと弟子たちを招きます。叙階後のマンシヨに関する記録は極端に少なくなります。そのことが、使節正使としての名声を求めず、順位争いとは無縁の、名前さえ残さないようなマンシヨの生きざまを鮮やかに映しだしてくれます。そこには、言われたとおり、満たされた水がめを黙々と運ぶあの召し使い（ヨハネ2・5）のように、音も立てず、そっと仕えて生きる伊東神父がいるのです。

新司祭マンシヨが派遣されたのは小倉の教会でした。当時の小倉は、大名細川

忠興の城下で、忠興自身はキリシタンではないものの、自分のために命を捨てたガラシア夫人を想い、夫人の洗礼と霊的指導にかかわったセスペデス神父を小倉へ招き厚遇しました。セスペデスは、まず小倉の城下に聖堂と司祭館を建て、2人の日本人修道士とともに豊前一円の宣教に着手します。1606年にはカミロ・コンスタンツォ神父と修道士2人が加わり、翌1607年には中津にも聖堂と司祭館が建てられました。年毎に豊前の宣教は勢いづいていました。

小倉教会の巡回地域には、海峡を挟んで山口の長門と周防も含まれていました。領主毛利輝元はその数年前からキリシタン弾圧を始め、萩ではメルキオール熊谷元直が、山口ではカテキスタのダミアンが殉教し、その後山口には1人の司祭もいませんでした。散らされ、おびえて生きる羊たちを世話するために、変装した「ひとりの神父」が殉教の教会に入っています。1611年の報告書を書いたロドリゲス・ジランは、その神父の名前を記していません。不注意からなのか、それとも名を留めることもない凡庸な司祭とみなしたからなのか、ロドリゲスの真意をはかることはできません。しかし、迫害下の山口に潜入できた「ひとりの神父」は、日本人司祭伊東マンシヨただ1人でした。

マンシヨは生き残った300人あまりの信者たちを、ゆるしと聖体の秘跡で力づけ、司祭がいなくとも一緒に祈り、共に学び、支えあって生きようと、信仰教育を機軸にした信徒の組織「サンタ・マリアの組」を興していきました。それは、やがてくる日本の潜伏教会の先駆けでもありました。

山口から戻ったマンシヨは、その足で日向の飢肥へ向かいます。有馬のセミナリオ入学から実に33年ぶりの里帰りでした。母と弟、親戚たちに迎えられ、50人あまりの受洗者を与えてくれた穏やかな故郷で、マンシヨは子どものように無邪気に天を仰ぐと、深く息をつきました。父と母と兄弟に囲まれ、はじめて福音を耳にしたマンシヨの原風景がそこにありま

した。

1611年12月、山口巡回と日向の宣教で確かな手応えを感じていたマンシヨに、突然の試練が襲いかかりました。長崎から戻ったセスペデスが修道院の玄関先で倒れ、出迎えたマンシヨに抱きかかえられたまま息絶えたのです。日曜日の朝、大勢の信者がミサのために集まり、見守る中でのごとでした。一方、知らせを受けた細川忠興は神父の遺骸を小倉に埋葬することを許さず、別の場所へ葬るように命じました。ガラシア夫人の恩義のためだけに教会を保護してきた忠興にとって、セスペデスのいない小倉の教会にはもはや何の用もありませんでした。その2日後、忠興はキリシタンとの決別を公言し、小倉の教会を破壊し、後任のマンシヨも追放し、キリシタン弾圧に着手したのです。

追放直前、マンシヨは大急ぎで「サンタ・マリアの組」の世話役たちを集め、洗礼の授け方、病人への塗油、葬儀の仕方などを確認し、その補佐役もつけるようにと勧めました。その中には、後に殉教する加賀山隼人や小笠原玄也もいました。下毛郡の国家老をしていた加賀山隼人の勧めで、マンシヨは中津の教会へ避難し、そこで最後のクリスマスを祝っています。

このとき、忠興の息子忠利が中津を治めていましたが、まだ教会には好意的でした。しかし、ここでの弾圧も時間の問題でした。マンシヨは山口や小倉と同じように、中津でも世話役を集めて信徒の組織を固めます。司祭がいなくなった教会であっても、信徒たち同士が心をつなげて生きていくように励ましています。信仰は個人ではなく、共同体の中から生まれ、共同体の中で育まれ、成熟し、伝えられていくことをマンシヨは誰よりもよく知っていたからです。

1614年に発布された江戸幕府の禁教令に先駆けて、豊前の教会にはすでに嵐が吹き始めていたのです。セスペデスの遺骸を長崎に送り届け、小倉に潜伏して信者を世話するカミロ・コンスタン

ツォと連絡をとり、中津の信者たちの信仰を鼓舞する伊東マンシヨ、気づいたら肩で息をついていました。言われたとおり運び続けた水がめを、世話役のところに届ける日が間近に迫っていました。

4. 殉教者を生むのは

「今年亡くなった会員の2番目は、伊東マンシヨ神父です。日向の国の出身で、43歳。彼は1584年にローマへ行った4人の日本人の筆頭格で、帰国してから世間のすべてのことを捨てて、1591年にイエズス会に入りました。会で過ごした21年間、彼はその修道者としての忠実と魂の救いに対する熱意によって、多くの人を感化してきました」（1613年1月12日付、コウロス書簡）

伊東マンシヨの死去について、イエズス会『1612年度日本年報』の紙面を割いたのはわずか数行だけでした。巡回司牧と忠興の弾圧のなかで奔走したマンシヨの体はもう限界でした。以前から患っていた結核が悪化したのです。中津の信者たちに別れを告げ、教会の扉を静かに閉じるマンシヨの姿が記録に留められています。

長崎のコレジオに戻って養生をはじめたものの、マンシヨの病状は回復しませんでした。そして1612年11月13日、ローマへの旅以来、父のように支えてくれたデイエゴ・メスキータと同胞原マルチノに見守られて、静かにその生涯を閉じました。「主がお入り用です」という招きに応えた43年の人生でした。

アクアヴィヴァ総長宛ての手紙（1592年12月1日付）の結びに、マンシヨは自分のことを「何の役にも立たないあなたの子ども」と記しています。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい（ルカ17・10）。マンシヨに向き合えば、僕となって、死に至るまで仕えて生きたイエスのみことばが真実味をもって迫ってきます。与えられた境遇を

黙って受け入れること、これが身を低くして仕えて生きる僕のしるしです（マルコ9・37）。

「信仰者は、信仰を他の人から受け取りました。それを他の人に伝えなければなりません」（カテキズム166）。

ザビエル、トルレス、アルメイダ、大友宗麟、ヴァリニャーノ、メスキータ、ボバディリヤ、セルケイラ、セスペデス——マンシヨに信仰を伝えた人たちです。高山右近（1615年マニラ）、加賀山隼人（1619年小倉）、加賀山半左衛門（1619年大分・日出）、カミロ・コンスタンツォ（1622年平戸）、中浦ジュリアン（1633年西坂）、ベント・フェルナンデス（1633年西坂）、トマス西（1634年西坂）、小笠原玄也・みや（1636年熊本）、デイエゴ結城了雪（1636年大坂）、トマス金鐐次兵衛（1637年西坂）、ペトロ岐部（1639年江戸）——マンシヨと出会い、共に祈りながらキリストの跡を歩み、やがて殉教していった仲間たちです。わたしが受けた信仰は誰を通してきたのでしょうか。そして、わたしは誰に信仰を伝えてきたのでしょうか。

「信仰のためにこの命さえ惜しまず捧げることができるよう。……そのとき、これまで海でも、陸でも耐え忍んできた多くの苦勞が、正しい目的のためだったということを知るでしょう」（1592年、総長への書簡）

マンシヨは手紙の中で、何度も殉教への憧れを吐露しています。血をもって証しする殉教は叶いませんでした。しかし、マンシヨは知っていました。流罪中に命を落とすもの、牢獄の辛い境遇に耐え抜いて命を落とすもの、そのほか、どこにおいても信仰のために疲労困憊のすえ道中で命を落とすもの、これみな丸血留（殉教者）なり（『マルチリオの心得』。信仰のために追放され、その旅先で疲れ果てて死ぬこと、これも殉教だと日本の教会は教えてきたのです。わずか4年間のマンシヨの司祭生活は、神と人に仕える人の長い殉教の旅だったのです。

「痛みや苦しみが殉教者を生むものではありません。日々の生きる動機が人を殉教者にするのです」（アウグスチヌス）殉教した多くの仲間と同じように、マンシヨもまたキリストの証し人となりました。伊東マンシヨ没後400年、黙って仕えて生きたマンシヨは、先の見えない現代の教会に「一条の光を灯してくれます」。



トードス・オス・サントス教会跡
セミナリオ・コレジオ跡（長崎市・春徳寺）

長崎甚左衛門がアルメイダに与えた寺を、1569年にヴィレラ神父が改築、諸聖人（トードス・オス・サントス）に献げた教会。後にコレジオやセミナリオも一時ここに移転された。各地の殉教者の遺骨が預けられたことから、巡礼地ともなった。伊東マンシヨはこの場所で、メスキータと原マルチノに見守られてその生涯を閉じた。その2年後、1614年の宣教師追放令の折、高山右近はここで「イグナチオの霊操」を行った。19年に破却、43年に春徳寺が移転し、現在に至る。（まるちれす研究会『ガリラヤへ』p.57）

わたしの住まいは彼らと共にある

エゼキエル37・27

山田教会献堂100周年

もと工事にかかった。

山田教会(中島誠志主任神父)周辺は信者ではない世帯。山田集落の中心にあたるこの土地は、信者の思いを理解し、譲って頂いたものである。浜から資材を運び上げる際には、信者でない方も一緒に運び上げてくれた。1912年に献堂された教会の歩みは、地域の人々との関わりを大切にしながら始まった。



9月29日、高見三

福者ガスバル西玄可家族が生月で殉教してからちょうど300年後の1909年、教会建設の声が上がった。パリ外国宣教会マタラ神父の指導により、17戸の信者は資金の工面に苦勞しながらも、棟梁鉄川与助施工の

明大司教を迎えての献堂100周年記念ミサでは、マカオから戻った殉教者遺骨が島原教会より分骨、安置された。

翌30日は生月出身3人目の司祭、百村等神父(聖パウロ修道会)の金祝を祝った。同日、中町教会で

イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

(ヨハネ13章1節)

教会学校の授業の中で、子供たちと過越しの食事について一緒に勉強したことがあります。イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から解放される前の晩に、子羊を屠って食べたという物語です。まず子供たちに、子羊の写真を見せました。「かわいい」と一斉に言いました。さあ、この子羊はどうなるのか、と話が進んでいきます。子羊は裂かれて、その血を家の入り口の2本の柱のかもいに塗り、肉はみんなで食されていきます。このことを聞くと、子供たちからは「残酷だ」「かわいそう」「神さまはひどい」という答えが返ってきました。イスラエルの民は救わ

みことばにふれて

谷脇誠一郎神父
(長崎カトリック神学院)



「まつばらこはんにて」
カット・望月大誠くん
(南山小・3年生)

化、高齢化社会、家族の崩壊・・・いろいろな問題を抱える人間社会です。「生きる」ということの背後に「死」というものがあることを忘れてはなりません。たとえば、毎日のようにいたたく

食事の中で、動物、植物の命をいただいています。つまり、動物、植物が死んだという事です。今、わたしたちは、スーパーに行つて、きれいなトレーに入った肉を買い、きれいに箱詰めされたお菓子を買い、それを食べます。しかし、その裏には、それらを裂いて、血を拭いた人がいます。気持ち悪いかもしれません。残酷かもしれません。しかし、わたしたちが命をいただくという事は、そういうことです。きれいな事ではなく、裂かれたもの、「死」の上に私たちは生きているのです。

最後の晩餐の時、イエスさまは私たちを愛してくださったと聖書に書いてあります。十字架の苦しみを受けて、死を迎えようとしているその前の晩です。弟子たちの足を洗い、過越しの食事をし、遺言ともいえる最後の説教をなさいます。うそも偽りもなく、きれいな事ではない、本当の愛の姿があります。

の列聖25周年記念殉教祭に合わせ、大きな恵みとなった。教会の保護者は7つの悲しみの聖母。迫害と殉教歴史の悲しみを、聖母は喜びへと取り次いでくださった。

八幡町小教区設立50周年

継いで来てく

9月12日に小教区設立50周年を迎えた八幡町教会(鍋内正志主任神父)は、9月23日、高見三明大司教司式のもと、南地区の司祭団、信徒代表多くの来賓と共に記念ミサと堅信式を行い、節目の年を祝った。初代主任の糸永真一司教(鹿児島教区前教区長)、2代目三村誠一神父も駆け付け、昔話に花を咲かせた。



同教会の広報部は、広報部が50年分の膨大な量の写真の中から厳選し、パネルに作成した『思い出のアルバム』を見ると、昔の子ども、昔の青年が今や熟年となり八幡町教会を支えています。多くの先輩が創り、守り、引き

小ヶ倉小教区設立25周年

面に「イエスのみ心」像を、

小ヶ倉教会(高田裕和主任神父)は9月9日、小教区設立25周年を迎え、高見三明大司教司式、教区司祭、修道会司祭およびマリア会司祭14人の共同司式で記念ミサを捧げた。



司祭団ソフトボール大会

長崎地区司祭団

9月25日、教区司祭団ソフトボール大会が、五島市中央公園を会場に開催された。今年のホストは五島地区司祭団チーム。他に佐世保・平戸地区チーム、長崎3地区チーム、修道会などの混成チームで熱戦が展開された。

始球式を高見三明大司教が務め、先輩司祭方や下五島地区の修道女、信徒の応援に力を得て、歓声あり、笑いあいの試合が続いた。当日の強風が追い風になり、各試合で長打が続出。長崎地区では3本のホームランを打った司祭が2人も出た。優勝は打撃戦を制した



優勝は打撃戦を制した

「みことばにふれて」カット募集

対象 小・中学生
締切 2012/12/20(木) 消印有効
規格 はがき大～A4サイズ
その他 住所・氏名・学年・所属教会を記入
問合先 広報委員会 Tel.095-843-3869

短 信

●純心女子学園
(顧問 松本裕子)は、8月17・18日に栃木県宇都宮市で開催された「平成24年度全国中学校総合文化祭」に県を代表して参加。「祈り」をテーマに「マザーテレサの祈り」[Ave Maria]など3曲の美し

神と出会う イエス・キリストと出会う 自分と出会う

カトリック 通信講座

やさしく解説されたテキストを通して、キリストと出会い、喜びを持って生きる新たな日々へと導きます。信仰年の始まりを機に、「無縁社会」とよばれる現代の中で、キリストの教えに触れたい方や、より学習を深めたい方にも最適です。「幸せな結婚」講座は結婚準備のためにも好評です(全7講座)。

T001	キリスト教とは	キリスト教の概要
T002	聖書入門〔I〕	四福音書(イエスの生涯)
T003	キリスト教入門	秘跡や信仰生活(洗礼準備にも)
T004	神・発見の手引	人生、自然を通して神へ
T005	聖書入門〔II〕	使徒言行録・書簡・黙示録
T006	幸せな結婚	結婚の意味や愛、幸福
T007	生きること・死ぬこと	命に関する問題

受講料 T001～T004 各4,500円(教材費・税込)
T005～T007 各5,000円(教材費・税込)

お申し込み方法

郵便振替用紙に講座名・講座番号(T001～T007)をご記入のうえ、下記にお振り込みください。

振替口座番号 00170-2-84745

加入者名 オリエンス宗教研究所

お問い合わせ・お申し込み

オリエンス宗教研究所 カトリック通信講座
〒156-0043 東京都世田谷区松原 2-28-5
Tel 03-3322-7601 Fax 03-3325-5322
URL <http://www.oriens.or.jp>
携帯サイト <http://www.oriens.or.jp/mobile/>

石 碑
納 骨 堂
墓地工事
墓地分譲
(高尾・本原他)

なが さき せき ちょう
長崎石彫
ヨゼフ 岩永 博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町6-17 岩永ビル

ドキュメンタリー映画「エンディングノート」
SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)
2011年度日本カトリック映画賞受賞作品

日 時: 2012年11月23日(金) ①11時～ ②14時～
場 所: カトリックセンター(長崎市上野町10-34)
入場料: 大人700円/シニア(60歳以上)・小～大学生500円
問合先: カトリックセンター宿泊部 Tel.095-846-4246
主催: カトリックセンター 後援: 教区広報委員会

当社オリジナル商品
一筆箋(教会編) 定価350円(税込)

各種印刷物のお見積りも無料です。お気軽にご相談下さい。

九州印刷株式会社
代表取締役社長 トマス 川原 保夫
〒852-8103 長崎市緑町4-5
TEL(095)846-6844 FAX(095)846-6845

白蟻調査無料・駆除工事5ヶ年保証付
白蟻防除施工士

大田白蟻研究所
代表者 マリア 大島 睦子
(〒850-0811) 長崎市矢の平1丁目14番15号
富長崎 095-822-8436
FAX 095-822-8488